

## ドイツの保育施設における子ども達の参画 (II) —モデルプロジェクト (Die Kinderstube der Demokratie) を観点として—

Partizipation der Kinder in Kindertageseinrichtungen in Deutschland (II)  
— unter dem Gesichtspunkt des Modellprojektes „Die Kinderstube der Demokratie“ —

船 越 美 穂

Miho FUNAKOSHI  
学校教育ユニット

(令和元年9月30日受付, 令和元年12月12日受理)

### I. 問題の所在と研究の目的

シュレースヴィヒ＝ホルシュタイン州の保育施設<sup>1</sup>における子ども達の参画のための取り組みは, ドイツ連邦16州の中でも先駆的な役割を果たし, バイエرن州の幼児教育計画 (Der Bayerische Bildungs- und Erziehungsplan für Kinder in Tageseinrichtungen bis zur Einschulung) にも影響を与えてきた<sup>2</sup>。

筆者はこれまでシュレースヴィヒ＝ホルシュタイン州の保育施設における子ども達の参画について, 幼児教育指針 (Erfolgreich starten- Leitlinien zum Bildungsauftrag in Kindertageseinrichtungen), 及び保育実践の分析によってその実際について明らかにしてきた (船越 2015, 2017)<sup>3</sup>。

本稿では, シュレースヴィヒ＝ホルシュタイン州の幼児期の子ども達の参画が注目されるきっかけとなったモデルプロジェクト「保育施設における民主主義への教育」(Die Kinderstube der Demokratie) の特徴を明らかにするとともに, モデルプロジェクトを当初よりリードしてきた参画と教育研究所 (Institut für Partizipation und Bildung) のクナウアーとハンゼンへのインタビューを通して, プロジェクトの経緯, その後の取り組み, 保育施設における参画の課題と展望について明らかにすることを目的とする。さらに研究結果から日本の保育の課題をも提言したい。

### II. 第1期モデルプロジェクト「保育施設における民主主義への教育」(2001-2003)

第1期モデルプロジェクト (Die Kinderstube der Demokratie 2001-2003) は, ルーディガー＝ハンゼン, ラインガルト＝クナウアー, ビアンカ＝フリードリヒによって, 保育施設における子ども達の参画を試行し, 発展させ, 施設の日常に根付かせ, 保育者を支援することを目標として実施された<sup>4</sup>。本稿におけるモデルプロジェクトのタイトルの和訳については, クナウアー氏に問い合わせを行い, 「保育施設における民主主義への教育」とした。

モデルプロジェクトは当時のシュレースヴィヒ＝ホルシュタイン州司法, 女性, 青少年, 家庭省による事業として位置づけられ, 環境, 自然, 営林省から予算を援助された<sup>5</sup>。

#### 1. シュレースヴィヒ＝ホルシュタイン州という風土

シュレースヴィヒ＝ホルシュタイン州はドイツの最北端に位置しており, 州都はキールである。地理的には北海とバルト海の間にあって, スカンジナビア, バルト海沿岸の諸国をつなぐ位置にある。

シュレースヴィヒ＝ホルシュタイン州は1996年に子ども達と青少年による参画する権利を, 市町村に関する法規 (Gemeindeordnung) に加えた最初の連邦州であった。従って, シュレースヴィヒ＝ホルシュタイン州では, モデルプロジェ

クトに着手した当時、青少年の参画についてはすでに実績があったのである。クナウアーはインタビューの中で、次の様に当時のことを振り返った。

「シュレースヴィヒ＝ホルシュタイン州は1996年に地方自治体と市のために法律を交付した。そこに市町村は子ども達と青少年に関わるすべての事柄に、子ども達を参画させなければならないと記載した。それほど早期に行ったのはシュレースヴィヒ＝ホルシュタインと一つか二つの連邦州くらいだった。これによってシュレースヴィヒ＝ホルシュタイン州では何人かの人のもとで、参画の風土が生まれた。特に省に、青少年省に2人の同僚がいて、とても支援をしてくれた。彼らは予算も与えてくれた。彼らがこのような風土が生まれることに大いに貢献をした。」

当時、幼稚園児は、外部のモデレーターを招いて遊び場の計画立案に参画したことが、モデルプロジェクトの報告書の中で明らかにされている<sup>6</sup>。多くの保育者達は子ども達の有能な協力に驚いたという。ある保育者が自らの教育実践を熟考しなければならないと述べた時に、モデルプロジェクトのプロセスの中で、保育者に同伴し専門性を高めるというアイデアが生まれ、プロジェクトの構想が決定した<sup>7</sup>。

モデルプロジェクトに参加する7園は応募によって選考された。選抜では、様々なテーマが包含されるように4分野にわたるテーマが考慮に入れられた。

- ①空間のプランニング(保育施設の内的空間の構成)
- ②保育コンセプトの発展(オープンにすること、教育的使命の実行)
- ③制度的な参画形態(保育施設の憲法)
- ④市町村を知る(子ども達による町計画)

## 2. モデルプロジェクトの目的

### (1) 民主主義への教育

モデルプロジェクトのタイトル「保育施設における民主主義への教育」(Die Kinderstube der Demokratie)からも明らかのように、その第一の目的とは子ども達の民主主義的な能力をトレーニングすることであった。このことに関しては、参画と教育研究所のハンゼンとクナウアーの揺るぎない信念が裏打ちしていることが彼らへのインタビューによって明らかとなった。

ハンゼンへのインタビューによると、当時、シュレースヴィヒ＝ホルシュタイン州の政治状況はドイツ社会民主党が緑の党と組閣しており、州の市町村に関する法規に子どもの参画を規定するなど民主主義教育への関心が強かった。まさにモデルプロジェクトの誕生にとって絶好の環境であった。

クナウアーらは、モデルプロジェクトの目的である民主主義教育について次のように述べている。

「民主社会は市民の関与を必要としている。政治参画は個人が介入し、責任を分かち合えることを前提としている。『政治的人格』のこの根本的特徴は実際には早くに発達する。保育施設はほとんどすべての子ども達にとって公的教育の最初の機関として意義がある。日常の参画の機会と、保育者の支援による参画能力の発達は、子ども達の政治的社会化にとって決定的な要素である。」<sup>8</sup>

モデルプロジェクトの民主主義的能力の習得という目的は、その後のシュレースヴィヒ＝ホルシュタイン州の幼児教育指針へと継承されることとなる。

### (2) 参画と教育の結合

クナウアーらによれば、第1期モデルプロジェクトへの着手の時期、シュレースヴィヒ＝ホルシュタイン州は、ブランデンブルグ州、ザクセン州と並んで、1997年から2000年までを期間とする、モデルプロジェクト「保育施設の教育的使命について」(Zum Bildungsauftrag von Kindertageseinrichtungen)への参加を決定していた。従って、「どのようにすれば子ども達の教育プロセスが促進されるのか?」という問題に保育者達は過敏になっていた<sup>9</sup>。第1期モデルプロジェクトは、参画が民主主義教育だけでなく、教育プロセスにとっても鍵であることを実証することができた<sup>10</sup>。モデルプロジェクトは、当時のドイツにおける学力低下問題や幼児教育改革をめぐる論議を背景に、参画を通して、子ども達の主体的な学びを立証することができた点によって広く反響を呼ぶこととなった。

以上のように、クナウアー、ハンゼンの民主主義教育への思いと、シュレースヴィヒ＝ホルシュタイン州の当時のリベラルな政治状況、そしてドイツの学力低下問題をめぐる幼児教育改革の動きが、モデルプロジェクト誕生の土壌を形成したの

である。

### 3. 保育施設の参画プロジェクト

選考された7つの保育施設の参画プロジェクトは以下のとおりである。

■キール市立保育施設 Osloring: わたしたちの Kita（保育施設）を自分たちで作る

■AWO（労働者福祉協会）保育施設 Hanna Lucas, Wedel: 子どもレストランからオープンな幼稚園へ

■社団法人 KiTa Waldstraße, Pinneberg: わたしたちは今や憲法を持つ

■ADS（社団法人シュレースヴィヒ労働共同体）幼稚園, Tarp: こどもたちのための、こどもたちによる町計画

■社団法人 IzzKizz, Itzehoe: わたしたちの町を案内しよう

■DRK（ドイツ赤十字保育施設）Turnstraße, Elmshorn: こどもたちと哲学すること

■福音教会幼稚園 Quickborn: わたしたちも今や憲法を持つ

本稿では、キール市立保育施設と ADS 幼稚園の実践の概要を紹介する。

#### (1) わたしたちの Kita（保育施設）を自分たちで作る

キール市立保育施設 Osloring では、2000 年の放火によって施設の一部が破損した。園舎の建て替えに際して、園庭も作り変えることとなった。シュレースヴィヒ＝ホルシュタイン州市町村に関する法規第 47 条 f によって、2001 年春に子ども達は園庭づくりの企画立案に参画した。モデルプロジェクトでは、新しい園舎の内部設備の企画立案に子ども達を参画させる機会を提供した。その際、保育者間でかねてよりテーマとなっていたオープン保育に適応した機能別ルームを採用することになった。

子ども達は「判断、ファンタジー、決断、プランニング」というプロセスの各段階に参画した。決断の段階では、子ども達は 1 人 3 枚ずつシールをもらって、希望する活動領域をリクエストした。その結果 68 の提案が出た。プランニングでは、各クラスより、子どもと保育者 1 名ずつを選出して、ワーキンググループを作って、68 の提案を分類した。その結果、14 の活動分野が生起した。各活動分野に対して、写真やスケッチによってコラージュが作られた。各クラスは子ども会議によって 3 つの活動分野を選んだ。

最終的に保育施設には、創造・実験ルーム、ごっこ遊びコーナー、人形ルーム、メディアセンター、休憩室、アトリエ、宝庫、ボールプール、植物と動物コーナーといった機能別ルームが作られた。また、運動ルームには様々な体操用の用具が置かれ、ホールには移動式の舞台が設置された。

#### (2) こどもたちのための、こどもたちによる町計画

ADS 幼稚園 Tarp のモデルプロジェクトでは、子ども達と一緒に町のマップを作成し、地元の家庭、旅行者に対して、子どもの視点から町を紹介することに取り組んだ。クラスを越えたプロジェクトであるため、翌年に就学する子ども達によって構成される子ども議会が召集された。保育者によるテーマ導入の後、子ども達は多様な方法で町を模造した。積み木や粘土でモデルを作ったり、床に大きな平面の道路を貼った。子ども達にとって町で大切だと思われる場所が描き出された。これらの場所はクラス内で評価され、子ども議会で希望する場所の数が確認された。遠足によって遊び場、警察、キオスク、市場、風車小屋などの場所が確かめられた。遠足の様子は写真で記録され、幼稚園ホールに展示された。子ども議会で道路地図のどこに訪問した場所があるのか印をつけて、その横に写真を貼った。クラス会議で代議員が結果を紹介した。子ども達は地図に訪問した場所のシンボルを掲載することを決定し、保育者に記載すべきテキストを口述した。子ども達の地図は専門家によってレイアウトされて印刷された。

クナウアーらはモデルプロジェクト報告書の中で、7つの保育施設のモデルプロジェクトで子ども達が学んだことをリストアップしている<sup>11</sup>。このリストを筆者によって翻訳したものを次頁に掲載する。

### 4. 保育者の役割と参画

クナウアーらによれば、子ども達の参画を支える保育者の役割は以下の通りである<sup>12</sup>。

■自分の政治的価値観と教育目標を明らかにすること

■幼児教育の理論的な議論に注目すること

■自分の対話的な姿勢を促進すること

■司会能力を獲得すること

表. 子ども達がプロジェクトで学んだこと

- |                                    |  |
|------------------------------------|--|
| - 自立                               | - 他の子ども達に特定の活動を思い起こさせる                               |
| - 自信                               | - 大人が言うことすべてを受け入れるのではない                              |
| - 傾聴されること                          | - 自分の要求を意識的に申し立てる                                    |
| - 自分の意見が大切であること                    | - 遊びを発明する  |
| - 自分の意見が価値を持つこと                    | - その遊びを試してみる   |
| - 他者の意見を傾聴する                       | - Tarp のことに詳しくなる                                     |
| - 問題に言及する                          | - どこに市長が住んでいるか                                       |
| - 他者の意見を受け入れる                      | - 地図を読んで、説明する  |
| - 他者と一緒に解決を見つける                    | - 難しい言葉（例えば、聖人伝）                                     |
| - 決定する                             | - より自立して、自信を持つようになった                                 |
| - 投票の仕方                            | - 新しいことにオープンであること                                    |
| - 共同で作った規則を守ること                    | - ラジオの女性と知り合いになった                                    |
| - 提供活動の後一緒に片付けること                  | - 新しい友情を結ぶ（クラスを越えた子ども同士のコンタクトが増えた）                   |
| - 規則があること、しかしいつもすべてうまくいくとは限らない     | - クラスで団結する   |
| - 合意すること                           | - 勇気を表すこと  |
| - 写真を撮ること                          | - 何かを言ったり、言わなかったりすること                                |
| - ラミネート加工すること                      | - はっきりとした会話を要求する                                     |
| - 選挙に立候補すること                       | - 共同決定を要求する  |
| - 出馬すること                           | - 権利を要求する（大人に対しても）                                   |
| - 十分な票を獲得できない                      | - 大人の意見を受け入れる  |
| - 誰かに投票すること                        | - アイデアと提案を与える（遊び、遠足、規則に対して）                          |
| - 議会プレートがかけられたら、今日は会議が開催される        | - 影響を及ぼす   |
| - 会議を開くこと                          | - 共同の解決方法を手に入れる                                      |
| - 会議を終えること                         | - ある事柄を支持する価値があること                                   |
| - 年少児や弱者に親切であること                   | - より自立した（子どもレストランで、自分で取り分けようとし、何か不足すると、自発的に食器を取りに行く） |
| - 政治家として有権者のために何かをしなければならない        | - 自分でしたい場合にのみ、何かをすること                                |
| - クラスのために委員会で発言をする                 | - 監獄を作ること  |
| - クラスで委員会の報告をする                    | - グループルームであちこち回れるように、<br>„Hoppetosse“をどのように作るか       |
| - 静かにするように他の子ども達に頼む                | - 戸外のココナッツは実際緑色だ                                     |
| - 社会委員会で大人に呼び鈴で呼びかけること             | - 遊びの規則を守る   |
| - 空間構成で意見を述べることができる                | - 遊びの規則も変えられる  |
| - 何かを変えることができる                     | - やたらにボスになると、つまらない。十分に注意を払わないといけないし、すべてを行うことはできないから。 |
| - 自分のアイデアを実行できる                    | - 一度もボスにならないのも、つまらない。                                |
| - 共同で何かを計画し、運営する                   |  |
| - ノコギリを使ったり、貼り付けること                |  |
| - 系統立てて熟慮すること：工作に何が必要か？どのように始めようか？ |  |



第1期モデルプロジェクトの特徴とは、保育者の役割を強調するだけでなく、むしろ保育者に同伴しながら、保育者の育ちを支えた点にある。クナウアーらは保育者の成長の必要条件を次のように示している<sup>13</sup>。

■参画的な管理運営：保育施設における参画文化の発展とは、保育者チームと組織の発展であって、そのプロセスをマネジメントするのは園長の任務である。園長には保育者達に研修を促し、スーパービジョンなどの実践への同伴のための支援体制を構築することが望まれる。園長は一方で保育者達をプロセスの経過の中で、あらゆる決定に参画させること、他方で共同の決議の実行を持続的に求め、何が阻んでいるのかについてテーマ化しなければならない。

■参画的な研修：保育施設に参画文化を発展させるためには、保育者は特別な教育的な方法コンピテンシーを使えなければならない。例えば、子ども達の参画が自己教育プロセスにとってどのような役割を演じるのか知っていなければならないし、子ども達の会話を司会できなければならない。保育者はこのような知識や能力を研修において習得する機会を持たなければならない。しかも研修は理論と実践を媒介するものでなければならない。研修は情報を与え、トレーニングをし、自己経験と自己省察の機会を提供すべきである。

保育者研修とは、まず第一に、自己教育プロセスに基づいている。つまり参画に関する研修は、参加者の関心と問題に結びつかねばならず、彼らに新しいテーマを期待するが、しかし無理強いせず、自分で立てた目標の実行の際には、必要な支援を当然与えられるものでなければならない。参画文化の発展に寄与する研修とは、一貫して参加者を参画させなければならない。

■参画的な同伴：クナウアーらによれば、保育者の個人的発達には、研修において確かに活気づけられる、しかしそれは、かなり長い期間を必要とする。このことは、保育者チームの発達プロセスにとっても同様のことが言える。つまり、理論と実践の間の討論は持続的に行われなければならない。参画、つまり現代的な乳幼児教育学は総じて、保育者に高度な個人的、専門的な発達を要求するので、保育者は自らの実践を省察し、さらに発展させる継続的な機会を持つ必要がある。そのため保育者の自発的な教育と発達のプロセスに、

資格を持った担当者が同伴し、適切に援助しなければならない。クナウアーらは、保育施設の教育活動のプロセスと質の確保や向上にとって、外部から専門的助言を受けることが重要であると、レッジョ＝エミリアアプローチの例を出して強調している。つまり、専門的助言と省察の構造の構築こそが、レッジョ＝エミリア教育の成功の基本的土台であると捉えている。

保育者達に持続的に同伴し、援助するという目的の実現のために、第2期モデルプロジェクトが誕生したのである。

### Ⅲ. 第2期モデルプロジェクト「保育施設における民主主義への教育」（2006-2008）

第2期モデルプロジェクト「保育施設における民主主義への教育」（2006-2008）では、参画と教育研究所がキール専門大学と連携して、保育者を伴走的に支援する20名の普及者（Multiplikatorinnen und Multiplikatoren）を養成した。彼らは今ではドイツ国内で保育者による参画、発展、省察の際に伴走的な役割を果たしている。この資格付与はシュレースヴィヒ＝ホルシュタイン州子ども・青少年アクションプランのプロジェクトとして予算援助を受けた<sup>14</sup>。当時の普及者は20名であったが、その後も養成は継続しており、ハンゼンへのインタビューによれば、2017年の時点で300名に登っている。

筆者はこれまで何人かの普及者に出会って話をしたことがある。彼女、彼らは、元保育者や園長で、ハンゼンらの普及者養成の講座を受けて資格を付与された。園長や保育職との両立をしているケースから、普及者の仕事に専念しているケースまで様々であった。筆者はそのうちの一人、S氏の保育者研修に2016年9月に参与観察をし、拙著においてその特徴と保育者の意識を明らかにした<sup>15</sup>。ハンゼンもS氏も、普及者養成や保育者研修のために、一年を通してドイツ全土を旅している。保育者を支援することで、保育施設における子ども達の参画の発展を促進しようとする彼らの熱意と努力は多大なものである。

### Ⅳ. 参画と教育研究所の関係者へのインタビュー

筆者は2017年9月28日にクナウアー、29日にハンゼンにインタビューを行った。インタビューは半構造化インタビューで、インタビューの自宅で行った。以下にインタビュー結果をカテゴリーごとに示すことにする。

## 1. 履歴から

クナウアーはキール専門大学で社会教育学を専攻した。その後、さらに総合大学で教育学を学んだ後、福祉団体 (Paritätische Wohlfahrtsverband) で継続教育を担当した。その後、保育系の専門大学の教員になるための養成を2年間受けて、1996年からキール専門大学で教育学専門の教授をしている。クナウアーは子どもが世界についてどのように考え、子どもにとって何が大切なのかに関心があった。クナウアーは大学の最初の勉学の時から、子ども中心の、子どもに権利を与える、オルタナティヴスクールに関心をもって研究をしていた。シュレースヴィヒ＝ホルシュタイン州では90年代、子ども達と青少年の地域における参画を求める強力な運動があった。つまり、都市計画、交通計画、遊び場計画においてだ。ここでクナウアーが即座に関心を持ったこととは、教育施設にとってどのような意味を持つか、ということだった。こうして、クナウアーは保育施設、若者の集まる場所、学校における参画の教育学的な側面に強い関心を持って、この問題に関する著書を出版した。クナウアーにとって、子ども達の権利が教育学の本質的なメルクマールなのである。

ハンゼンはキール専門大学卒業後、幼稚園に15年間勤務している。大学で学んだ理論には関心がなかった。ハンゼンはいつも学んだ事柄に矛盾を感じていたという。既述したように、当時、シュレースヴィヒ＝ホルシュタイン州の政治状況はドイツ社会民主党が緑の党と組閣しており、市町村に関する法規に子どもの参画を規定するなど民主主義教育への関心が強かった。ハンゼンは緑の党の青少年大臣に面会をし、1997年に幼稚園における参画についての最初の専門会議の企画運営を行った。それは1997年9月20日の世界子どもの日に開かれた大きな専門者会議だった。その後、州の研修を受けて、子どもと青少年の参画を促す (Kinder- und Jugendfreundlichkeit) モデレーターとしての資格を取得した。その後、幼稚園の園庭改造を行う会社に雇われて、子ども達と共に遊び場計画のために働いた。この経験の中で、参画コンセプトが発展した。

## 2. モデルプロジェクト

モデルプロジェクトはハンゼンが始めた取り組みであった。当時、既に園庭改造の会社に所属して、子ども達との遊び場計画に取り組んでいた。そこではハンゼンらが保育施設に行って、初対面

の子ども達を参画させなければならなかった。ハンゼンによれば「それはいつも極めて骨の折れる仕事で、高くついた。なぜなら時間が必要だったので。」と述べている。第1期モデルプロジェクトの説明の際に既に述べたように、多くの保育者達は子ども達の有能さに驚くと共に、自らの教育実践の省察の必要性に気づいた。ハンゼンは自らの経験に保育者達の思いを結びつけることによって、自身が子ども達を参画させるのではなく、保育者と話し合い、子ども達を参画させる際には保育者達に同伴する、つまり保育者が実践できるようにトレーニングするという方法を開発し、モデルプロジェクトで実践することを創案した。

モデルプロジェクトの予算を獲得したハンゼンは、クナウアーを学問的同伴者として引き入れたと考えた。ハンゼンは、親がイニシアチブを取るキールのキンダーラーデン (Kinderladen) に自分の子どもが在籍しており、別のキンダーラーデンにはクナウアーの子どもが在籍していることで、彼女のことを知っていた。クナウアーも既に子どもの参画について関心が高まっていたので、ハンゼンの申し出を受け入れた。クナウアーによると、シュレースヴィヒ＝ホルシュタイン州の当時の担当者は、参画を地域の公共空間だけでなく、保育施設にも転用したいと考えていた。実践家としてのハンゼン、研究者としてのクナウアー、そして州省の担当者ら行政との共同によって、モデルプロジェクトが誕生したのである。

## 3. 参画への原動力と理論的背景

ハンゼンはインタビューの中で、自らの幼稚園での実践、子ども時代の体験、そして現代にも根強く残っている権威主義的教育について語った。

### (1) 幼稚園での出来事

幼稚園で保育者をしていた頃、同僚達からいつも子ども達との活動の仕方が「無茶だ」と言われた。

ある日、5歳の二人の子どもが自分のところへやってきた。ハンゼンは彼らが一歳になる前から知っていた。子ども達は「散歩へ行ってもいい?」と聞きにきた。「どこへ行きたいの?」と聞くと、「うん、散歩へ行くの。」と答えた。ハンゼンは、子ども達がどこへ行くのかを自分に話すつもりはないことを理解した。ハンゼンは前日に一緒に公園に行っており、彼らは何かを発見したが、昼食の時間になったために立ち去らねばならなかったことを思い起こした。子ども達はそこへ戻りたい

のだろうと考えた。ハンゼンは、「君たちが大通りの方へ行かなくて、公園の方にしか行かないなら、行ってもいいよ。」と言うと、子ども達は「わかった。」と答えた。男児達は夏から就学するので、練習のために時計を持っていた。ハンゼンは「時計の長い針が上になったら、昼食の時間だ。君たちは戻ってこなければならないよ。」と彼らと約束をした。

この時の出来事を研修で話すと、今なお、参加者達はびっくりして両手を頭の上で打ち合わせ、「それは全くよくないよ。あなたはどうかしてるよ。それは危険だ。何か起こるかもしれない。」と言う。しかしハンゼンは、子ども達が当時の状況の中でそのことができるし、彼らにとってそれは良いことだと考えた。保育者として、このようなことをいつもしていたと言う。ハンゼンは、「これは、私が人とどのように付き合うかという私の気持ちから来ている。」と語っている。

当時はヤヌシュ＝コルチャック（Korczak, Janusz, 1878-1942）のことを知らなかった。しかし今では、コルチャックが100年前によく似た行動をしていたことを知っている。コルチャックは子どもにこのようなことを許可して、認めた。そして、いつも彼は自問した。どのような権利で私たちは他者の自由を制限しているのかと。ハンゼンにとって当時はっきりしなかったこととは、なぜ子ども達に禁止した方が良いのかということだった。

ハンゼンは大学時代に学んだアレクサンダー＝ニール（Neill, Alexander Sutherland, 1883-1973）のサマーヒルの実践についても熟考して、幼児にも通用すると考えた。マカレンコ（Макаренко, Антон Семёнович, 1888-1939）からは、どのように人と尊敬の念を持って付き合うかという姿勢を学んだという。

## （2）小学校時代の体験

ハンゼンの子ども達の参画へのモチベーションは、自らの小学校時代の体験にまで遡る。10歳の時、体育の授業で金属製のボールの頂上まで登らなければならなかった。4本のボールが並んでいて、男児4人ずつ登らねばならなかった。体育教師は下において、ほんのわずかの男児のみが頂上まで登ることに成功した。大抵の者は（ハンゼンもその1人だが）、半分までのところで、それ以上行けなかった。力がなかったし、技術もなかった。ハンゼンは次のように語っている。「体育教師はその場に立って、私たちに関する話をした。

つまり、私たちを侮辱して、クラスのみんなの前で物笑いのタネにした。私はそのことをどう感じたか、今日まで覚えている。無力であること、そのことになすがままになること、それは不当で、彼は本当はそれをしてはならないという感情を抱いていたこと。しかし私はそれに対して何をすべきか分からなかったこと。」

ハンゼンがこの話をする時、保育者も、保護者も、すべての参加者達は、確かに私たちにも分かると共感する。このような状況をたびたび学校で、または家庭においても、私たちすべてが体験したことがあると。ハンゼンは続けて次のように語った。「ドイツで買い物や、レストランへ行くと、子ども達が大人によって効果的な方法で辱められている状況を、繰り返し、目の当たりにすると思う。このことに関して強い思い出がある。それを変えることこそが、私にとっての大きなきっかけだ。それこそが私の原動力だ。私はこのことに影響を及ぼしたい。精神的暴力が及ぼされる幼稚園での食事場面などの無数の状況がある。年少の子どもは眠くないのに眠らなくてはならない。しかも全員が同じ時間に午睡しなければならないなどの問題だ。このような状況は幼稚園の日常では無数にある。そのことに私は耐えられない。そのことが私の原動力だ。それが動機だ。暴力を防止すること。」

筆者とクナウアー、ハンゼンとの出会いは、2012年10月にまで遡る。当時、筆者はハンゼンの案内でモデルプロジェクトに参画した園の一つである、福音教会保育施設 Quickborn を見学した。モデルプロジェクト参加からすでに10年ほど経過しており、オープン保育が定着していた。保育者達は自分の得意分野を持って、研修でさらに能力を伸ばす努力をしていた。各保育者は得意分野を生かした独自のプロジェクトを担当しており、見学当時は14テーマであった。参画は保育園クラスの年少児から始まっていた。10名の0歳～2歳児を、4名の保育者が担当していた。保育者達は創造、運動、言語、瞑想という得意分野を持って、子ども達は関心のある活動を選んで、活動担当の保育者の周りに集まる。子ども達は午睡の時にはどの場所で眠るかを自分で決めることになっている。ハンゼンのどんなに小さな子どもであっても、自分に関わることの決定に参画する権利を持つ、という願いは、保育施設の日常生活の中で実践されていた。



#### 4. 参画と教育研究所 (IPB)

ハンゼンとクナウアーらはモデルプロジェクト終了後に、参画と教育研究所 (Institut für Partizipation und Bildung, 以下 IPB と略) を設けて、外部に向けて情報を提供している。メンバーは現在では、クナウアー、ハンゼンに加えて、ハンブルグ大学教授、ミュンスター専門大学教授、キール専門大学教員、普及者の資格を持つ元保育者ら、11 名で構成されている。クナウアーは IPB について、「仕事の繋がりを持たせるための協会として研究所を設立した。私達はこのテーマ (参画) に様々な立場で、様々な役割で取り組むこととなった。IPB は私達にとって名前を知らしめるために、私達のことを明らかにするために設立した。」と語った。

ハンゼンは、「保育施設における民主主義への教育 (Die Kinderstube der Demokratie) はコンセプトだ。それは教育コンセプトのような考え方だ。保育者達の仕事を参画的に形成することに同伴する際の、背後にある考え方だ。IPB は実際の考えを分かち合っている人の連合である。私がまさに様々な分野で参画のこの考えを分かち合っている、様々な専門大学や、研修・継続教育を行うメンバー達だ。ラインガルト (クナウアーのファーストネーム) と私はモデルプロジェクト (Die Kinderstube der Demokratie) を一緒に発展させた。私は実践において発展させ、彼女は学問的な同伴をして、省察した。その結果チームワークはよく機能した。IPB はこの連合以上のものではない。制度的な機能を持つものではなく、むしろ人々の観念上の連合だ。」と語った。

IPB の創立によって、参画プロジェクトの共同作業としての性質がますます強まったと捉えられる。

#### 5. 普及者の養成

ハンゼンもクナウアーも、モデルプロジェクトのプロセスの中で、保育施設が多すぎて自分達だけでは同伴できないことに気づいた。シュレースヴィヒ = ホルシュタイン州には約 1700 園の保育施設がある。どのようにして 7 園から 1700 園へ参画のコンセプトを広めるかを熟考した。当時、州では市町村で青少年と遊び場計画や道路計画を行うためのモデレーター養成が行われていた。ここから示唆を得ながら、省、同僚とも一緒によく考えて、保育施設のための普及者養成を案出したとクナウアーは振り返っている。こうしてシュレースヴィヒ = ホルシュタイン州では、2006 年

から 2008 年に普及者養成のための第 2 期モデルプロジェクトが立ち上がって、20 名の普及者が誕生した。その後、さらに同州で養成を行うとともに、連邦レベルに拡大されていった。普及者の養成はすでに 15 回行われており、300 名が資格を与えられた。

クナウアーによると、普及者養成では、参画を国連子どもの権利条約の実現と、保育施設における教育の質の向上に結びつけるようにしている。この両面からのアプローチこそが、参画の普及の鍵となっていることが理解できる。

#### 6. 理論と実践の往還

クナウアーとハンゼンらは、本人達が何度も言う様に、まさに上手く連携をしている。ハンゼンは、「ラインガルトと私はまさに連携している。理論と実践だ。私はいつも専門大学の理論と、保育施設の実践の間のいわば媒介者だ。これこそ私たちが実践の中で発展させたコンセプトの特徴をなしている。どこかの机上で生まれた考えではなく、行動の中で生まれた。そして繰り返し、省察をしている。この行ったり来たりは、実際いつもコンセプトの発展において起こったことだ。」と述べている。クナウアーによると、保育者達は当初、参画によって自らの権力を委譲する必要があるため、困惑したという。今では、保育者達は参画を自明のこととして受け止めることができるようになったという。それは、「決して理論的にのみ発展させたのではなく、いつも実践によって発展させたこと、いつも研修で確かめ、多くのフィードバックを得たことだ。理論と実践によって、共に発展させることがコンセプト」だったからであると語った。

クナウアーとハンゼン達は、保育施設で何が起こったのか物語ることを大切にしている。そのためのツールとして、彼らは DVD 映像、絵カード、絵本などの視聴覚教材を制作出版している。クナウアーは、「私たちはこのような実践的な材料によって理論付けしながら、活動したことによって、多くの保育者達に行き渡らせることができた。」と述べている。

#### 7. 移民の背景を持つ子ども達

ドイツの保育施設には移民の背景を持つ子ども達が多く在籍している。保育施設における参画においてどのような配慮が必要か質問した。クナウアーは「参画はすべての子ども達にとって重要だ。移民の背景を持とうが、持つまいが。移民の



背景を持つ子ども達は特に参画で利益を得る。なぜなら参画は、『私は君に関心がある。君が大切だと考えていることに関心がある。世界に関する君の考えに関心がある。』ことを前提にしているからだ。さらにクナウアーは、「移民の背景を持つ子ども達は固定したグループではなく、他の子ども達もそうであるように多様である。参画によってこの違いを明らかにし、理解するチャンスを持つことになる。」と語った。また、参画によって、子ども達はモチベーションを持って、自分の願いを言葉で表現しなければならない。従って、参画によって言語的発達をも促進しているという。

ハンゼンも「文化的な断絶はほとんど見られないというのが私の体験だ。むしろ貧富や教育の格差の方が問題だ。文化間の違いよりも、文化の中での違いの方が大きい。」と述べている。そしてハンゼンによれば、「参画アプローチは家庭から良い条件で園に来ていない子ども達を一層援助することができる。彼らは他者に役割を果たすことを経験する。重要なのは彼らが影響を与えることができることだ。」と述べた。

ハンゼンによれば、移民の子ども達を含むインクルージョンの問いは、方法的な問題であって、私たちが複雑なことを解きほぐして、子ども達に感覚的な経験ができる様にすることが必要だと語った。つまり、いつも方法的に転用しなければならないだけで、姿勢は同じである、と語った。

## 8. 課題と展望

ハンゼンもクナウアーも、これまで困難はなかったと答えた。クナウアーはその理由として、モデルプロジェクトでは全く小さなことから始めて、第2ステップとして普及者の養成に着手したことをあげている。これらはまさに「雪玉効果」があったという。ハンゼンも、「私たちは保育施設を民主的に形成することを試み、小さなことから着手する。するとそれは成長していき、ますます大きくなって、新しい問いが生まれ、私たちは再び答えを見つける。私はこの全プロセスをこれまで困難だと感じたことはなかった。」と答えた。

唯一、クナウアーがあげたのは、保育者達が参画の際に、親の理解を得ることに苦慮するケースがあることだ。このような場合に、クナウアー達は保育者が親と連携できるように支援しているという。ハンゼンは「困難なのはひょっとすると資源なのかもしれない。どの様に問い合わせに対応できるかだ。それが唯一の時々困難だと思われる

ことだ。しかしこれまでのところいつも答えを見つけてきた。私はそこで起きることを楽しんでい。そのことがこれほど関心を広げるとはなんと喜ばしいことだ。」と語った。

クナウアーの希望とは、可能な限り多くの子ども達が民主的な幼稚園で学べることだと語った。そのために普及者の養成を通して多くのことを達成できたと述べた。クナウアーは保育施設における子ども達の参画の普及が今や保育施設ごとではなく、設置体プロジェクトとしてより大きな広がりが見られると語った。例えば、シュレースヴィヒ＝ホルシュタイン州のAWO（労働者福祉協会）が設置体となっている保育施設では、参画コンセプトによって運営することが義務付けられた。クナウアーによると、設置体が参画に取り組むことによって、より大きな広がりを持続性が期待できる。

クナウアーによれば、近頃では、一般新聞、地方の日刊新聞、薬局が発行している新聞などからの取材によって、参画コンセプトが世間から受け入れられていると感じるという。クナウアーは、世間からの注目について、「多くの保育施設の実践に起因している。しかしひょっとすると、民主主義を守るために、早期から民主主義教育を始めなければならないと、人々が気付いていることに少し起因しているのではないか。」と分析している。

クナウアーは専門大学での養成段階で参画のことをさらに学生に理解させるために、カリキュラムに強く規定することが必要であると述べている。しかし、保育者養成については、ハンゼンは少し違った考えを持っている。つまり、ハンゼンによれば、参画は純粹に理論的に伝達されることはできなくて、むしろ継続教育で行われなければならない。つまり参画を経験するための実践が必要で、試してみなければならない。若い保育者達は養成機関で参画について講義を受けてきている。しかし彼らが理論的に聞いてきたことに怪しいことがある。つまり養成学校の教える側に参画が明確に理解されていないのである。ハンゼンは、「それは長い道のりで、社会におけるパラダイムの転換」が要求されると語った。

さらに、ハンゼンは、子ども達の自由をいつ制限することが本当に正当化されるのかについて話し合わないで、「すでにいつもそうだったから。」と答えることが多いことに、ナチ教育学の影響を指摘した。ヨハンナ＝ハーラー（Johanna Haarer, 1900-1988）という女医はナチズムの時代

に育児書を書いて多大な影響を及ぼした。ハンゼンは、祖母が言っていたことでよく覚えていることがある。それは、乳児は言葉が話せない間は4時間ごとに授乳されるべきこと、騒々しい時には暗い部屋に入れておくこと、と育児書に書かれてあったということだ。ハンゼンによると、「それがナチ教育学だ。そこでは最初から人間を破壊すること、自分の意志を壊すことが重要で、そのことが文書化された。」という。この育児書はドイツでは1980年代まで販売されていた。ハンゼンは、育児書の「その思想はそこにある、いまだに多くの場面に存在している。」と語った。

保育者達はたびたび、「私たちは子ども達をすでに参画させている。」と言う。「私たちは、ここと、ここと、ここで子ども達に聞いている。」と。「しかし、いつか結論を出さねばならない。私たちは決定しなければならない。」と答える。そんな時、ハンゼンはいつも質問する。「いつ結論を出さねばならないのか?」と。この質問に保育者達はほとんど答えることができない。ハンゼンは、「そのことが問題だと思う。まだ全く長い道のりだと思う。それは数十年続くだろう。」と続けた。

以上のように、ハンゼンによると、ヨハンナ＝ハーラーの育児書の考え方は、いまだに保育現場に影響を与えているという。1920年代から1930年代に、ヨーロッパではコルチャックやニールなどの改革教育学の多くのアプローチがあった。しかし1968年頃までドイツでは彼らの思想は抹殺されていた。その間に大きな穴がある。ハンゼンはそこに自分たちのアプローチをうまく結合させることができると考えている。そこに、「作ることのできる歴史があるのではないか。」と語った。

ハンゼンによると、これまでの取り組みを誰が引き継ぐのか、自分たちの役割を誰が先へ続けることができるのかという問いの解決に着手していると語った。それは普及者を持続的に養成できるシステムづくりだという。つまり普及者を養成できる指導者を育てることだ。これが究極の課題であるとしている。さらに、保育施設における子ども達の参画では、コルチャックやニールが行ったような、子ども達が法律や規則を公布するような保育施設はほとんど存在しない。つまり、立法と司法の面では大人達が実権を握っているケースが多い。参画の内容的な検討も今後の課題であると語った。

## V. モデルプロジェクトの影響

### 1. シュレースヴィヒ＝ホルシュタイン州 市町村に関する法規の改正

第1期モデルプロジェクトの終了後の2003年に、州の市町村に関する法規(Gemeindeordnung)の子ども達の参画に関する規定が、Soll-Bestimmung(強制的な規定ではなく、限定的な裁量も認められている－筆者による)から、Muss-Bestimmung(いかなる場合でも遵守しなければならない、裁量の余地のない規定－筆者による)に改正された<sup>16</sup>。この改正によって、子ども達と青少年の参画の市町村による保障が完全に義務となった。

市町村に関する法規改正の背景の一つに、第1期モデルプロジェクトの成功があったことが、当時のシュレースヴィヒ＝ホルシュタイン州司法、女性、青少年、家庭省大臣アンネ＝リュートケスの言述からも明らかである<sup>17</sup>。市町村法規の改正によって、新しい遊び場の建設場所や交通網整備計画、そして遊び場のプランニングの際にも子ども達は参画しなければならなくなった<sup>18</sup>。シュレースヴィヒ＝ホルシュタイン州市町村に関する法規第47条fは以下の通りである。

- (1) 市町村は子ども達や青少年の利害に関わる計画立案とプロジェクトの際には適切な方法で彼らを参画させなければならない。このために市町村は第16条aから第16条fによる住民の参画に加えて適切な手続きを講じなければならない。
- (2) 子ども達や青少年の利害に関わる計画立案とプロジェクトの実行の際には、市町村は適切な方法で、どのようにして彼らの利害を顧慮し、参画が第1項によって実行したのかについて説明しなければならない。

### 2. 「幼児教育指針」の刊行と保育の現在

シュレースヴィヒ＝ホルシュタイン州では、2004年に「人生の始まりを首尾よく－幼児教育指針」(Erfolgreich starten- Leitlinien zum Bildungsauftrag in Kindertageseinrichtungen 以下、幼児教育指針と略)第一版を草案として公表した。著者はクナウアーとハンゼンであった。その後、現場における試行期間を経て、2008年8月に改訂版が刊行された。幼児教育指針では、「保育者は子どもを自身の教育プロセスの主体として受け止めなければならない。子ども達の関与なしに教育が成り立ち得ないことから、参画が教育への鍵となる。」<sup>19</sup>として、参画が教育の成立

条件とする教育観に立っている。さらに、拙著（船越 2015）においてすでに明らかにしたように、幼児教育指針では、指導原理として「民主主義」を掲げ、保育施設を民主主義の学習とトレーニングの場として位置付けている<sup>20</sup>。教育領域「文化、社会、政治」では、保育者自身が「政治／民主主義への自らの理解を熟考」し、「民主的共同体としての保育施設」を作ることが要求されている<sup>21</sup>。筆者がフィールドワークを行ったシュレースヴィヒ＝ホルシュタイン州の保育施設では、オープン保育、提供活動の選択、機能別ルーム、作業共同体、ビュッフェ式の昼食、子ども議会などによって、子ども達による保育施設の自分達に関係する事柄への参画が保障されていた<sup>22</sup>。

## Ⅵ. まとめと今後の課題

シュレースヴィヒ＝ホルシュタイン州のモデルプロジェクトは、州の民主的な風土に支えられて、様々な立場の関係者達が共同して取り組んだことに特徴がある。この共同作業というスタイルは現在まで一貫している。クナウアーはインタビューの中で次の様に述べている。

「少し幸運だったのは、このテーマ（参画－筆者による）が大切だと考える様々な登場人物が相互理解をすることができたことだ。同僚のD博士、青少年省のK氏がテーマに夢中になった。このテーマに感動する青少年補導員がいて、様々なレベルで登場人物達が出会った。そしてこのテーマをますます先へ進めていき、頑固でもあった。つまりこのテーマに取り組むことを止めなかった。」

クナウアーもハンゼンも、これまで困難だと考えたことはなかったと答えた。しかしインタビューの中でクナウアーは、未だにしばしば、子ども委員会や子ども憲法などの参画形態が政治的過ぎるとして批判されると語った。しかしクナウアーらはこのような参画形態が大切であると考えている。なぜなら、委員会や憲法によって、子どもの権利が分かりやすくなるからだ。クナウアーらが批判をもバネに活動し続けてこられたのは、まさに彼らが共同作業をしてきたからであると考えている。筆者はクナウアーとハンゼンらのIPBという組織自体が、参画コンセプトによって機能する、民主的な作業共同体であると考えている。

クナウアーとハンゼンが共通して強調したのは、モデルプロジェクト「保育施設における民主

主義への教育」は「机上で生まれた考えではなく、行動の中で生まれた、そして繰り返し省察して、実践によって発展させる」コンセプトであるということだった。クナウアーによると、前述した一部の抵抗にも、今ではほとんど合わなくなったという。それは、保育現場に分かりやすい様に、参画の実践を可視化することに努力していることが一因であると考えている。彼らは、実践や研修に役立つ様に書籍、DVD映像、絵カードを開発するとともに、子ども達にも理解しやすい絵本をシリーズ化して出版している。

さらに、筆者がクナウアーとハンゼンへのインタビューで痛感したことは、保育施設における民主主義への教育にはゴールなど存在しない、ということだ。民主主義という政治形態がそうであるように、常に人間の試行と努力の積み重ねが必要である。未だにドイツ社会には権威主義的な考え方や、子どもの権利を軽視する思想が存在していることを理解した。第1期モデルプロジェクトの終了から16年を経てもなお、クナウアーとハンゼンらの活動が止まることなく、現在進行形で続いているのは、子どもへの精神的暴力を根絶して、子どもの権利を保障するための、究極的には社会のパラダイムの転換を目指す闘いであるからだ。

日本では「幼稚園教育要領」、「保育所保育指針」、「幼保連携型認定こども園教育・保育要領」の改訂によって、「主体的・対話的で深い学び」が幼児教育から小学校、中学校、高等学校までを貫く教育の鍵概念となった。主体的・対話的で深い学びは、まさに学び手の「参画」を要求する。幼稚園教育要領等の改訂に携わった専門家達は海外で行われているプロジェクト活動やポートフォリオなどの保育実践をも念頭に置いていることが推察される。しかしここで忘れてはならないこととは、参画とは、元々民主主義的な資質と能力を子ども達が習得するために、教育現場に導入された方法であるという歴史的経緯と関係者達の努力である。この点を軽視するならば、子ども達の参画は方向性を見失うことになるであろう。シュレースヴィヒ＝ホルシュタイン州の関係者達の取り組みから何を学ぶべきかが、今、問われているのである。

また、近年、カリキュラムマネジメント、幼小連携・接続、子育て支援など、保育施設への期待がきわめて大きく、それによって保育者の負担は増すばかりである。そこに保育者不足という問題が絡んでおり、保育者の置かれている状況は厳し



い。シュレースヴィヒ＝ホルシュタイン州の参画と教育研究所のクナウアーとハンゼンらは、保育施設における子ども達の参画の発展に努力し続けているが、常に支援の対象は保育者である。保育者に伴走的に支援をし、参画型の研修を行うことによって、保育者の成長を促進することに力を注いでいる。ここには、保育者はまさに保育実践の中で成長するという元保育者であるハンゼンの信念があることを、インタビューの中で理解することができた。保育者への伴走型支援と参画型の研修という点において、私たちの学ぶことは決して少なくないを考える。

今後は、シュレースヴィヒ＝ホルシュタイン州を中心とする、ドイツの保育施設における参画の実践をさらに分析するとともに、保育者、子ども、保護者の意識をも明らかにすることが課題である。さらに、日本の保育施設における参画と比較することによって、連続性と非連続性を明らかにすることも今後の課題としたい。

**謝辞** 本研究では、キール専門大学教授のクナウアー氏、参画と教育研究所のハンゼン氏にご協力をいただいた。ここに感謝を表する。

**付記** 本研究はJSPS 科研費 15K04304 の助成を受けたものである。本論文は、その一部を日本教育学会第 78 回大会にて発表した。

## 註

<sup>1</sup> ドイツの施設型保育施設は、①3歳未満児対象の保育所 (Kinderkrippe)、②3歳～就学前の幼児対象の幼稚園 (Kindergarten)、③小学生対象の学童保育 (Hort) に区分できる。現在、ドイツでは様々な形態の施設を総称して、Kindertageseinrichtungen、又は Kindertagesstätte (Kita) という名称と呼ぶ。しかし、州によって様ではない。例えば、バイエルン州ミュンヘン市では、生後9週間から12歳までの子ども達が在籍する施設、子ども達の家 (Haus für Kinder) がある。本稿ではドイツの就学前期の子どもの達を保育する施設の総称として、保育施設という用語を使用する。また、日本の場合においても、幼稚園、保育所、認定こども園等を総称して、保育施設という表現を用いることとする。

<sup>2</sup> バイエルン州の幼児教育計画 (Der Bayerische

Bildungs- und Erziehungsplan für Kinder in Tageseinrichtungen bis zur Einschulung) では、第8章第1節「子ども達の教育的出来事への関与－参画」の冒頭で、シュレースヴィヒ＝ホルシュタイン州のモデルプロジェクトから示唆を受けたことが明記されている。実際、この節の原案への助言者として、クナウアーとハンゼンの名前が巻末に記載されている。

<sup>3</sup> 船越美穂 (2015) 「幼児期における民主主義への教育 (V)－シュレースヴィヒ＝ホルシュタイン州の保育施設における子ども達の参画－」福岡教育大学紀要、第64号第4分冊、153-162頁。

船越美穂 (2017) 「ドイツから見える日本の保育風景」季刊保育問題研究第288号、新読書社、8-17頁。

<sup>4</sup> Hansen, R. /Knauer, R. /Sturzenhecker, B. (2011) : Partizipation in Kindertageseinrichtungen. Verlag das netz. Weimar. Berlin. S. 353.

<sup>5</sup> Hansen, R. /Knauer, R. /Friedrich, B. (2004): Die Kinderstube der Demokratie. Partizipation in Kindertagesstätten, Kiel.

<sup>6</sup> Hansen, R. /Knauer, R. /Friedrich, B. (2004), a. a. O., S. 26.

<sup>7</sup> Ibid.

<sup>8</sup> Ibid., S. 8.

<sup>9</sup> Hansen, R. /Knauer, R. /Sturzenhecker, B. (2011), a. a. O., S. 354.

<sup>10</sup> Ibid.

<sup>11</sup> Hansen, R. /Knauer, R. /Friedrich, B. (2004), a. a. O., S. 54.

<sup>12</sup> Ibid., S. 82-86.

<sup>13</sup> Ibid., S. 94.

<sup>14</sup> 参画と教育研究所ホームページ

<https://www.partizipation-und-bildung.de/kindertageseinrichtungen/die-kinderstube-der-demokratie/> 2019.7.27 アクセス

<sup>15</sup> 船越美穂 (2018) 「ドイツにおける子ども達の参画を促す保育者研修の実際と参加者の意識が意味するもの」福岡教育大学紀要、第67号第4分冊、107-119頁。

<sup>16</sup> Hansen, R. /Knauer, R. /Sturzenhecker, B. (2011), a. a. O., S. 51.

<sup>17</sup> Hansen, R. /Knauer, R. /Friedrich, B. (2004), a. a. O., S. 7.

<sup>18</sup> Hansen, R. /Knauer, R. /Sturzenhecker, B. (2011), a. a. O., S. 52.

<sup>19</sup> Ministerium für Soziales, Gesundheit, Wissenschaft und Gleichstellung des Landes

Schleswig-Holstein (Hrsg.) (2012): Erfolgreich  
starten. Leitlinien zum Bildungsauftrag in  
Kindertageseinrichtungen, Kiel. S. 6.

<sup>20</sup> 船越美穂（2015）前掲書，155 頁。

<sup>21</sup> 同上，157 頁。

<sup>22</sup> 同上，157-161 頁。

